

第17回Kozoom テーマ

「行く年 来る年」

清水健二

今年もまもなく暮れていく。来年は米寿を迎えることになった。昭和、平成、令和とよくここまで生きてきたなと思う。

近年、年末になると今年もいろいろあったなと思うことが多くなった。10年程前までは、「来年も変わりなく元気に暮らせたならそれが一番幸せ」と感じていた。ところが長生きすることで、知人や身内の訃報に寂しさを覚えたり、自分の身体の衰えから日頃の活動に支障を訴えはじめた。また自然災害に見舞われ困窮する人々や、悲しい事件等の報道に心痛むことがあまりにも出会い過ぎるようになった。正月が来てもさほど感慨もなかった頃がもっと気楽だったと思うようになってきた。

特にコロナ禍がもたらす社会的制約でライフスタイルが一変し、高齢者にとって一層フレイル現象を助長するようになって、改めて自分自身の生き方も考えねばならないと思う昨今である。

日本では人生百年は珍しくなくなったし、「うまいこと 老いる生き方」というハウ・トゥーものの本が出て、誰にも長寿を有意義に生きる方法を教えてくれるようになった。私も前向きにもう少し生きてみようかと思いながら、毎年続けてきたことを来年もその通りやれないものだと思えるようになってきた。だからといって諦観してしまわず、変化を素直に受け止め、継続できるものはやっていき、心の負担にならない生き方が賢明だと思っている。

私は年末には女房と、両親の出身地である二上山麓にある墓へ、片道1時間程かけお参りすることになっている。また大晦日の夕食には年越しそばを戴き、夜は近くのお寺(常光寺)に行って、除夜の鐘を撞く予約をし、百八つの一つを撞きお餅を頂いて帰る。翌朝はこれも近く神社(八尾神社)へ初詣をし、お神酒を頂いて帰り、朝食にお屠蘇にお雑煮を摂るのが恒例の習慣としてきた。

この年末も、生駒市に住む末の娘が運転する車で墓参の予定をしているが、やがて体力的にこの事も難しくなっていくだろう。墓の維持を娘に託するかどうかの課題を残している。

昨年はコロナ禍でお寺では除夜の鐘に人々を集めることもできず、寺側だけで鐘を撞くことになり、私は寝床で鐘の音を聞くことになった。今年も無理かなと思っていたらやる予定になって、もとの生活に戻れそうだが、夜中に出かけるのが少々億劫になってきている。

私は信心深いわけではなく、多くの日本人が習慣にしてきたことをやっているだけで、私の家は代々浄土真宗で月参りに僧侶が訪ねてきて、お経をあげてもらっている。ところが、私は宗派の違う禅寺の常光寺の住職と縁があって、親しくお付き合いをしてきた。この寺は弘仁年間(810~824年)小野篁が本尊の地藏菩薩を造像したと伝えられ、平安時代の1088年白川法皇が参詣している記録もある。何より1615年の大坂夏の陣の古戦場として、徳川方の藤堂高虎率いる陣営が敷かれ、歴史的に重宝な遺物が多く残っている。現在、臨済宗南禅寺派に所属しているが、古くから河内の名刹として「地藏さん」と親しまれ地域の人々の心の拠り所になってきている。

またこの寺では毎年8月下旬の地藏会には、境内で盆踊りが盛大に執り行われ河内音頭の発祥の地でもある。河内一帯は古くから盆踊りが盛んで、各所で連が組まれている。

2017年には市内の久宝寺緑地公園の広場で、一斉に踊る人数が2872人に達したことがギネス世界記録になり、大げさにいえば人々は熱狂的である。しかしコロナ禍の影響で2年連続で中止され人々の楽しみが奪われてきた。来年はどうなるだろうか？

話は脱線したが、私はかねてから郷土史に関心があって、定年後、素人なりに色々調べては、八尾市の文化協会が発行する季刊誌に何度か寄稿してきた。その中に、常光寺もその一つとして取りあげている。6年前本堂改修時に廃材となった古柱を頂戴し、仏像を彫って寄進奉納したことは、既にホームページにご紹介した通りで、この寺とは何かと縁が深いのである。

この禅寺へ数年前には月に1回、早朝1時間程座禅を組みに通っていた。毎回10数人の人達が集まって住職が語る般若心経の一節を聞き、時に法話に感じ入ったものである。座禅の最中に住職の打つ警策に心身がリフレッシュされたものである。ところが腰痛がひどくなり足を組んで背筋を伸ばすことが辛く、休みがちになって住職から椅子に掛けてでも良いからと言われたが他の人の手前、そうは行かず足が遠のいてしまった。

元旦に初詣する八尾神社も近くに在って、去年は毎年戴くお神酒は、コロナ禍で控えさせてもらおうとあって参詣者には頂戴できなかった。来年は大丈夫だろうか？

八尾神社は常光寺より古く、私の居住地は昔からの村落で、これらの社寺が人々の生活の中心地であったようだ。それだけに由緒ある神社として引き継がれてきている。

八尾の地は1500年も昔、物部氏の支配する領地であった。南北朝の時代にこの地に砦があって城と読んでいたのだろう。境内に碑が建っていて「矢尾城址」とある。弓矢の矢を作っていたようである。文献を探って調べてみるのも面白いテーマだと思っている。

年末、年始の何でもない私の生活習慣を紹介したが、その何でもないことさえ年々環境の変化や、身体の老化によって難しくなりつつある。親しい友人たちが他界したり、人との交流も少なくなり、小旅行さえままにならなかった。何といってもこの2年間のコロナ禍は、様々な局面で日常生活を一変させ、ステイホームを強い、他人との接触を回避させる社会情勢は、人々を孤立化させ、孤独に苛まれる現象をもたらした。人は誰かと関わりあい、話し合いながら生きていく動物だから、会話のできない生活は耐えられないものだ。少しでも交流できる人を増やし、助け合える努力が大切だと思っている。お互いに共有、共感しながら刺激を受けられるように自分の生活を見直すようになってきたつもりである。幸い私は趣味の仲間に恵まれ、共通の話題をもとめ、交流しながら今年は作品づくりに集中できたと思っている。来年もしぶとく生き、思い出を作り出す日々を過ごしたいものだと願っている。

「めでたさも 中ぐらいなり おらが春」と詠った小林一茶のような穏やかな心境で正月を迎えたいと思う今年の暮である。

令和3年12月



常光寺山門と本堂遠望



常光寺の除夜の鐘つき案内



河内音頭による盆踊り



河内音頭発祥の地 碑



矢尾城址の碑